

遭難は突然やってくる。残された者がどこまで何をできるか？ 仲間同士の理解と友情に頼るしかない。今回は最悪の事態ではあったが針葉樹会としてできるかぎりのことはできた。にわか在京連絡先となり、会員諸氏に突然の現地出動要請を頻発し、ご迷惑をかけた立場として改めてご協力に感謝するとともに概要を報告したい。

一体何が起こったのか、起こっているのか？この確認が第一歩だった。3.21 の夜、西牟田が HUHAC に「近藤が妙高で怪我をしたらしい」との情報を流した。電話してみると「詳細不明だが木にぶつかって骨折したらしい」とのことで「そうか」と受けた。ところが 10 時に加藤から連絡が入り、「**どうも大変らしい。骨折どころではないらしい**」との話が変わった。途端に血の気が引いた。3.8 に八ヶ岳の天狗岳で転倒して以来調子が悪く、自分はとても出動できる状態にはない。どうするか？ 加藤は明日朝 6 時半に妙高の現地本部に出頭する予定だが応援が欲しいという。自分が在京連絡先となるしかないと判断、早速西牟田に現地での連絡のために出動を要請した。快諾を受けた。次いで山の中へ入るメンバーも必要だと考え山田に電話した。山に出かけていてその夜遅く帰ると言うことだった。そんな状態ですぐさま山へとんぼ返りできようか？ 加えて井草、引地にも連絡して可能性だけを確認した。いずれも必要であれば動くと言ってくれた。夜 11 時、帰宅した山田と連絡がとれて彼も明日出動してくれることになった。西牟田と連絡しあい車で出かけてもらうことにした。第一次の応援体制ができたものの落ち着かない夜を過ごした。

事態は最悪だった。翌 3.22 の 7 時 36 分、前神の携帯に電話を入れた。思いがけず電話の向こうから前神が応じた。その時彼は救援隊と合流すべく、外輪山の稜線にいた。「すみません近藤は亡くなりました。今救援隊を待って稜線にいます」。いつもの明瞭な声の向こうで吹雪がうなっていた。そしてほどなく電池切れで通話は途絶えた。前神が一人で吹雪の稜線にいる。無事に帰れるのか？ 6:30 現地救援対策本部に着いた加藤からも「近藤は亡くなった。ヘリで降ろすしかない。ご家族が妙高に向かっている」との決定的な連絡が 8 時 20 分過ぎに入った。一体何が起こったのか？ そうなると遺体の搬出と、同行している前神と佐藤の無事帰還が目標になった。

加藤が川名に若手の出動候補をあたってもらうことにした。その後、宗像、川名からも出動可との連絡が入った。松尾からも出動可と入った。これで相応の人数は揃った。越後湯沢にいた古田は急遽妙高に向かい 9 時には加藤と合流した。西牟田と山田は 9 時に豊田を出発した。川名はご家族対応のためにも直ちに出勤したいと言ってくれた。

前神が下れるかの心配はあるものの会員が救援に山に入る必要は消えつつあり、また、加藤がずっと現地にいるわけにもゆかず、事務処理に主眼を置いた第 2 次隊の出動が必要と思われた。そこで中村さん、川名に連絡、出動をお願いした。二人で連絡しあい電車を出発してもらうことになった。さらに、遺体収容に時間がかかった場合現地詰めの交代が必要と思われ高崎さんにも連絡、お出掛け申したが明日なら出動可と快諾をいただいた。

11 時、加藤から前神無事下山の連絡が入った。ふっと力が抜けた。山中対応として待機していたメンバーに HUHAC を通じて待機解除を流した。それからは遺体収容がいつになるかを待つ状態となった。16 時、佐藤も救援隊と共に下山し、2 重遭難は回避された。ヘリは強風のため現地に行けず遺体は現場に残された。夜、加藤、古田、山田は業務を中村、西牟田、前神、佐藤、川名に引き継ぎ帰京した。実に長い日曜日だった。

翌 3. 23 悪天のためヘリは飛ばず、高崎さんの出動のタイミングは計りかねたが昼前に車で出発した。高崎さんが到着後西牟田、前神、佐藤が業務を引き継ぎ帰京した。会社で仕事をしながら現地との連絡を繰り返す月曜日となった。天気予報では明日の午後以降冬型になるとのことだった。

翌 3.24、11 時過ぎわずかなチャンスを生かしてヘリが現場に飛び遺体を収容して戻った。その連絡をうけて 4 日間の在京連絡先の任務は終わった。出動いただいた会員、待機いただいた会員、そしてかたずをのんで HUHAC をご覧いただいた会員、皆さんに感謝。近藤君に合掌。